

# 作家の像

太宰治

青空文庫



なんの随筆の十枚くらい書けないわけは無いのであるが、この作家は、もう、きょうで三日も沈吟ちんぎんをつづけ、書いてはしばらくして破り、また書いては暫くして破り、日本は今、紙類に不足している時ではあるし、こんなに破っては、もつたいないと自分でも、はらはらしながらそれでも、つい破ってしまう。

言えないのだ。言いたいことが言えないのだ。言っている事と言ってはならぬ事との区別が、この作家に、よくわからないのである。「道德の適性」とでもいうべきものが、未だいまに呑み込めて居ない様子なのである。言いたい事は、山ほど在るのだ。実に、言いたい。その時ふと、誰かの声が聞える。「何を言ったって、

君、結局は君の自己弁護じゃないか。」

ちがう！ 自己弁護なんかじゃ無いと、急いで否定し去つても、心の隅では、まあそんな事に成るのかも知れないな、と気弱く肯定しているものもあつて、私は、書きかけの原稿用紙を二つに裂いて、更にまた、四つに裂く。

「私は、こういう随筆は、下手へたなのでは無いかと思う。」と書きはじめて、それからまた少し書きすすめていって、破る。「私には未だ随筆が書けないのかも知れない。」と書いて、また破る。

「随筆には虚構は、許されないのであつて、」と書きかけて、あわてて破る。どうしても、言いたい事が一つ在るのだが、何気なく書けない。

目的の当の相手にだけ、あやまたず命中して、他の佳よい人には、塵ちりひとつお掛けしたくないのだ。私は不器用で、何か積極的な言動に及ぶと、必ず、無益に人を傷つける。友人の間では、私の名前は、「熊の手」ということになっている。いたわり撫なでるつもりで、ひっ搔かいている。塚本虎二氏の、「内村鑑三の思い出」を讀んでいたら、その中に、

「或ある夏、信州の沓掛くっかけの温泉で、先生がいたずらに私の子供にお湯をぶっかけられた所、子供が泣き出した。先生は悲し相な顔をして、『俺のすることは皆こんなもんだ、親切を仇にとられる。』と言われた。」

という一章が在ったけれど、私はそれを讀んで、暫時、たまら

なかった。川の向う岸に石を投げようとして、大きくモオシヨンすると、すぐ隣に立っている佳人に肘ひじが当つて、佳人は、あいたた、と悲鳴を挙げる。私は冷汗流して、いかに陳弁しても、佳人は不機嫌な顔をしている。私の腕は、人一倍長いのかも知れない。

随筆は小説と違つて、作者の言葉も「なま」であるから、よつぽど気を付けて書かない事には、あらぬ隣人をさえ傷つける。決してその人の事を言っているのでは無いのだ。大袈裟おおげさな言いかたをすれば、私はいつでも、「人間歴史の実相」を、天に報告しているのだ。私怨しえんでは無いのだ。けれども、そう言うともた、人は笑つて私を信じない。

私は、よつぽど、甘い男ではないかと思う。謂いわば、「観念野

郎」である。言動を為すに当つて、まず觀念が先に立つ。一夜、酒を呑むに当つても、何かと理窟りくつをつけて呑んでいる。きのうも私は、阿佐ヶ谷へ出て酒を呑んだが、それには、こんな経緯が在るのだ。

私は、この新聞（都新聞）に送る随筆を書いていた。言いたい事が在つただのだけれど、それが、どうしても言えず、これが随筆でなく、小説だったら、いくらでも潤かつたつ達はんすうに書けるのだが、と一箇月まえから腹案中の短篇小説を反芻はんすうしてみても何やら楽しく、書くんだったら小説として、この現在の鬱屈の心情を吐露したい。それまでは大事に、しまつて置きたい。その一端を、いま随筆として発表しても、言葉が足らず、人に誤解されて、あげ足とられ、

喧嘩けんかをふっかけられては、つまらない。私は、自重していたのである。ここは何とかして、愚色を装い、

「本日は晴天なり、れいの散歩など試みしに、紅梅、早も咲きたり、天地有情、春あやまたず再来す」

の調子で、とぼけ切らなければならぬ、とも思うのだが、私ははなは甚だ不器用で、うまく感情を蓋おほい隠すことが出来ないたちなのである。うれしい事が在ると、つい、にこにこしてしまう。つまらない失敗をすると、どうしても、浮かぬ顔つきになってしまう。とぼける事が、至難なのである。こう書いた。

「誰もそれを認めてくれなくても、自分ひとりでは、一流の道を歩こうと努めているわけである。だから毎日、要らない苦勞を、



たいへんしなければならぬわけである。自分でも、ばかばかしいと思うことがある。ひとりで赤面していることもある。

ちつとも流行しないが、自分では、相当のものつもりで出処進退、つつしみつつしみ言動している。大事のまえの小事には、戒心の要がある。つまらぬ事で蹉さてつ跌してはならぬ。常住坐臥に不愉快なことがあつたとしても、腹をさすつて、笑っていなければならぬ。いまに傑作を書く男ではないか、などと、もってもらしい口調で、間拔けた感慨を述べている。頭が、悪いのではないかと思う。

たまに新聞社から、随筆の寄稿をたのまれ、勇奮して取りかかるのであるが、これも駄目、あれも駄目と破り捨て、たかだか十

枚前後の原稿に、三日も四日も沈吟している。流石さすが、と読者に膝ひざを打たせるほどの光った随筆を書きたい様子なのである。あまり沈吟していたら、そのうちに、何がなんだか、わからなくなつて来た。随筆というものが、どんなものだか、わからなくなつてしまつたのである。

本箱を捜して本を二冊取り出した。『枕草子』と『伊勢物語』の二冊である。これに拠つて、日本古来の随筆の伝統を、さぐつて見ようと思つたのである。何かにつけて愚鈍な男である。「と、そこまでは、まず大過なかつたのであるが、「けれども」と続けて一枚くらい書きかけ、これあいけないと、あわてて破つた。もう、そのすぐ次に、うかと大事をもらすところであつたの

である。

一つ、書きたい短篇小説があるのである。そいつを書き上げる迄は、私に就<sup>つ</sup>いて、どんな印象をも人に与えたくないのである。なかなか、それは骨の折れることである。また、贅<sup>ぜいたく</sup>沢な趣味である、という事も、私は知っている。けれども、なるべくなら、私はそれまで隠れていた<sup>い</sup>。とぼけ切っていた<sup>い</sup>。それが私のよ<sup>う</sup>な単純な男には、至難の業なのである。私は、きのうも思い悩んだ。こう、何気ない随筆の材料が無いものか。死んだ友人のこ<sup>と</sup>を書こうか。旅行の事を書こうか。日記を書こうか。私は日記というものを、いままでつけた事がない。つけることが出来ないのである。

一日中に起つた事柄の、どれを省略すべきか、どれを記載すべきか、その取捨の限度が、わからないのである。勢い、なんでもかでも、全部を書くことになって、一日かいて、もうへとへとになるのである。正確に書きたいと思うから、なるべくは眠りに落ちる直前までの事を残さず書いてみたいし、実に、めんどろな事になるのである。それに、日記というものは、あらかじめ人に見られる日のことを考慮に入れて書くべきものか、神と自分と二人きりの世界で書くべきものか、その心掛けも、むずかしいのである。結局、日記帳は買い求めても、漫画をかいたり、友人の住所などを書き入れるくらいのもので、日々の出来事を記すことはできない。けれども、家の者は、何やら小さい手帖に日記をつけ

ている様子であるから、これを借りて、それに私の註釈をつけよう  
と決心したのである。

「おまえ、日記をつけているようだね。ちよつと貸しなさい。」  
と何気なさそうな口調で言ったのであるが、家の者は、どうい  
うわけだか、がんとして応じない。

「貸さなくても、いいが、それでは僕は、酒を飲まなくてはなら  
ぬ。」頗る唐突な結論のようであるが、そうでは無い。その他に  
は、この随筆から逃れる路みちが無くなっているのである。ちやんと  
した理由である。私は、理由が無ければ酒を飲まないことにして  
いる。きのうは、そのような理由があつたものだから私は、阿佐  
ヶ谷に鹿爪しかづめらしい顔をして、酒を飲みに出かけたのである。阿

佐ヶ谷の酒の店で、私は非常に用心して酒を飲んだ。私は、いま、大事を胸に抱懐しているのであるから、うつかりした事は出来ない。老大家のような落ち付きを真似して、静かに酒を飲んでいたのであるが、酔って来たら、からきし駄目になった。

与太者らしい二人の客を相手にして、「愛とは、何だ。わかるか？ 愛とは、義務の遂行である。悲しいね。またいう、愛とは、道德の固守である。更にいう、愛とは、肉体の抱擁である。いずれも聞くべき言ではある。そうかも知れない。正確かも知れない。けれども、もう一つ、もう一つ、何か在るのだ。いいか、愛とは、——おれにもわからない。そいつが、わかったら、な。」などと、大事もくそも無い。ふやけた事ばかり言つて、やがて酔いつぶれ

た様子である。





# 青空文庫情報

底本：「太宰治全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成1）年6月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集第十卷」筑摩書房

1977（昭和52）年2月25日初版第1刷発行

初出：「都新聞 第一八八二五号～一八八二七号」

1940（昭和15）年3月25日～27日発行

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2008年8月19日作成

2016年7月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 作家の像

太宰治

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>